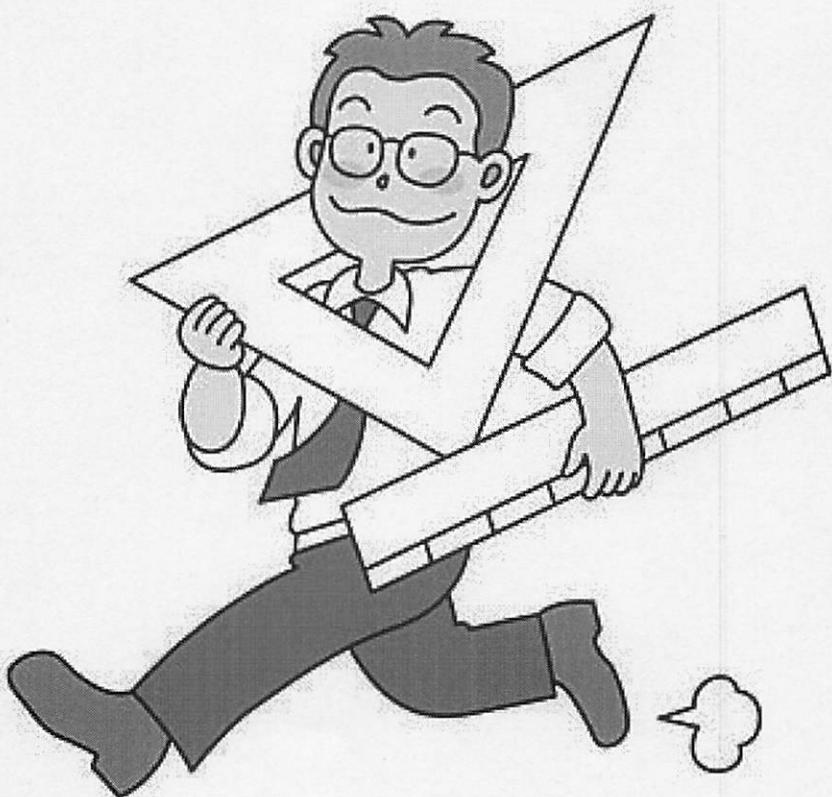


【学習方法・指導方法・学び方】



仲間と学習する力を高める物語文の読み取り指導

～学び方を定着させた上で関連発言リレー方式～

精華小学校 保母 征之

1 授業改善の視点

- ・児童の学習への主体性を高める指導の在り方
- ・仲間の発言から自分の考えを高めていく指導の在り方

2 具体的な実践

(1) 1時間の学び方指導

単元の導入において、学習計画を立てる。その時間にこれから学習する読み取り学習の1時間の流れを提示する。

1時間の流れ

- ①本時の課題の確認（学習計画から）
- ②音読
- ③本時のキーワード交流
- ④個人追究（読み取り）
- ⑤発表訓練
- ⑥全体追究 →関連発言リレー
- ⑦先生から
- ⑧まとめ



読み取りの第1時間目に流れを確認しながら、学習の流れと手段について確認する。

(2) 教師は基本的に話さない、待つ指導

読み取りの2時間目からは、教師からはあまり話さない。学習計画から本時の課題を板書し、児童が課題の確認をする挙手を待つ。それが終わったら、また音読を始めるまで待つ。次の活動を考えて自分から進めようとしている児童をほめ、価値づける。全員の音読が終わったら、キーワードの挙手があるまで待つ。そして個人追究7分。7分が終了した時点で、児童が自分は読みとった内容から伝えたい内容を選択し、2回発表の練習をする。これも待つ。それが終わったら全体交流のために挙手するのを待つ。

A児童の挙手回数とまとめの評価

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時
挙手回数	6回	11回	25回	33回	28回
まとめ評価	○	○	◎	○	◎

(3) ハンドサインを使っての関連発言リレー

全体追究の場面において、仲間の考えを捉えさせるために、前の仲間の発言にどこか関連付けて発表するようにルールを決めた。関連させる時にはハンドサインでチョキを出し、優先して指名することを児童に伝え、関連発言リレーがどこまで続くかチャレンジさせた。関連させるポイントとしては、

- ①前の人気が読み取った本文との関連させて
- ②前の人気が読み取った内容と関連させて
- ③前の人人の感想や考えに関連させて

の3つを与えた。児童は、自分の考えと同じところ、ちがうところを意識しながら仲間の発言を聞くことができ、読み取りを広げていく姿につながった。あまり深まりがない時は、教師がリセットし、「他の視点からどうぞ」と声をかけた。

(4) 教師の出場の精選

全体交流で課題について大きく読みとったことを教師が整理した後に、本時のねらいにさらに迫るために、教師からの発問を位置づけ、もう一度児童が立ち止まって思考する場を設けた。



ここでは、ねらいに迫る発言に対して、問い合わせを行い、登場人物の様子や場面の様子について捉えられるよう指導した。

3 実践を振り返って考えられること

学び方指導は、児童が学習のやり方が分かり、見通しをもって学習に取り組む姿につながった。自分たちの力で授業を進めているという実感は、進んで読み取りをしたり、挙手発言したりするなどの意欲的に学習活動に取り組む児童の姿につながった。

関連発言リレーは、仲間の発言に耳をかたむけ、自分の考えと比較しながら聞ける力を向上させた。これによって、仲間と学ぶ楽しさを感じはじめている児童がいる。

わかった、できたという喜びのある算数授業

～筋道立てて考えたり、自分の考えを表現したりする力を育成するための指導の在り方～

共栄小学校 上條 和佳子

1 授業改善の視点

- 仲間と共に学び合うための表現方法を身につけさせる指導の工夫

2 具体的な実践

(1) 使わせたい表現を明確にした単元指導計画の作成

毎時間の学習で使わせたい表現を明確にし、単元指導計画（資料①）の中に位置づけることで、教師が使わせたい表現を意図的に用いることにつながる。適切な表現方法や正しい用語を使って話すことのよさを実感させることで、筋道を立てて考えられるようになると考え、実践を行った。

<3年生「小数」の実践より>

本単元では、「0.1のいくつ分」や「0.1をもとにして考える」が考えの足場となる。第7時（小数の加法）では、次のような児童の様子が見られた。

リットルますの図を指し示しながら、根拠を明確にして計算の仕方を説明することができた。

「1めもりは0.1Lだから、ここが（3めもりを指差し）0.3Lです。0.5Lを加えるから、ここから5めもり増やすと、0.8Lになります。だから、 $0.3+0.5=0.8$ 答えは0.8Lです。」

「0.1のいくつ分」という根拠を明確にして、計算の仕方を説明することができた。

「0.3は0.1の3こ分です。0.5は0.1の5こ分です。0.1のいくつ分か考えると、 $3+5=8$ 0.1の8こ分です。だから、 $0.3+0.5=0.8$ 答えは0.8Lです。」

(2) ねらいを明確にしたペア交流

ペアでの交流活動のねらいを焦点化し、効果的に位置づけることで、活動に必然性が生まれ、つけたい力の定着につながると考えた。そこで、聞き手と話し手、それぞれの視点を明確にして実践を行った。

<3年生「小数」の実践より>

個人追究後のペア交流

話し手：自分の考えを明確にする。

わからないことを表出する。

聞き手：自分の考えとの共通点や違いに気付く。

全体交流後のペア交流

話し手：根拠を明確にして正しく表現する
聞き手：根拠を明確にして正しく表現しているか確かめる。

互いの考え方と共通していることは何か気づき、一人一人が自分の言葉で学習のまとめをすることができた。

「どの考え方も0.1をもとにして考えている。」

「0.1をもとにして考えると、小数のたし算も整数のたし算と同じように、位をそろえて計算することができる。」

3 実践を振り返って考えられること

使わせたい表現を単元指導計画に位置づけることで、仲間と共に学び合う児童の姿をより具体的に捉えることができた。また、交流活動において、話し手と聞き手の視点を明確にし、ねらいを焦点化することで、自分の考えと比べながら聞く力が育ってきた。

しかし、仲間の意見をしっかりと理解しないまま安易に「わかりました」等の返事をする、

記述内容を声に出して読んでいるだけという児童の姿も見られる。仲間と学び合うための表現力を全員に身につけさせるために、今後は、算数的表現力を「算数の内容に関わる表現」と「学び方に関わる表現」とに分けて捉え、研究を進めていきたい。そして、表現力の高まりが思考力の高まりを育む授業を目指していく。

資料①

使わせたい表現を明確にした単元指導計画

5 単元指導計画（全 12 時間）				No. 1
次時	はしたの大きさの表し方		小数のしくみ	
	1	2	3	4
ねらい	かその部分を語り、複数分の大ささを何等分に表すかなどから、小数の表し方を理解する。	長さの場合でも、複名数で表される数量を小数を用いて單名数で表すことができる。	今朝「牛乳」1/100㍑「牛乳一升」1㍑の順とそらの順を語り、數直線上に並べたり、題題見比べられたりして、小数の位置を理解する。	数直線と小数との関係についての理解を深めること。
評価標準	習得型 (技)複数部分のかさを、0.1㍑のいくつ分をもとにして小数を用いて表すことができる	習得型 (技)複名数で表された長さを單名数で表すことができる。	習得型 (知)小数のしくみを理解している。	習得型 (技)小数の構成を理解している。
使わせたい表現	・問題文を箇条書き ・図をもとにして考えました。 ・分数を使って考えました。 ・10等分したいくつ分 ・0.1㍑のいくつ分	・1㌢は1cmを10等分した1つ分 ・0.1cmのいくつ分	・1Lを10等分しているから～ ・1めもりは0.1Lを表しているから～ ・0.1Lのいくつ分 ・算数用語(割、倍、小数、1/100L、小数-B、B)	・1を10等分しているから～ ・1めもりは0.1を表しているから～ ・0.1のいくつ分 ・数直線を指し示しながら話す。
学習活動	①問題 P 20 [1] ・問題文を箇条書きし問題を捉える。 ・全部で 2L3dL であることを捉える。 ②課題 2L3dL を、L の単位だけで表そう。 ③個人追究→ペア交流 ・図を使って考える。 ・3dL を 3/10L として分数で考える。 ④全体追究 ・1L の 1/10 を 0.1L と表すことを理解する。 ・0.1L のいくつ分をもとにして小数を用いて表せることを理解する。 ⑤まとめ 2L3dL は 2.3L と表すことができる。 0.1L のいくつ分のかさかを考える。 ⑥評価問題 P 21 [1]、[2]	①問題 P 22 [2] ・問題を読み、前時との違いを確認する。 ②課題 小数を使って、8 cm 6mm を、cm の単位だけで表そう。 ③個人追究→ペア交流 ・8mm を 8/10cm として分数で考える。 ・かさと両様に小数で表せないか考える。 ④全体追究 ・1cm は 0.1cm と表すことを理解する。 ・0.1cm のいくつ分をもとにして小数で表せることを理解する。 ⑤まとめ 8 cm 6mm は 8.6cm と表すことができる。 0.1cm のいくつ分の量とかを考える。 ⑥評価問題 P 22 [1]、[2]	①問題 P 23 [1] ・問題を読み、前時との違いを確認する。 ②課題 0.7L、2.6L を、数の間に表そう。 ③個人追究→ペア交流 ・1L を 10 等分した数の様であることをおさえる。 ・1めもりは 0.1L を表している。 ・0.7L は 0.1L のいくつ分かを考える。 ・2.6L は、2L と 0.6L を合わせた数であることをもとにして考える。 ④全体追究 ・0.7L、2.6L の確認 ・りんご問題で、数の間に表されたかさを読み取る。 ⑤まとめ (用語を定義する) 小数 小数点 1/10の位 小数第一位 ⑥評価問題 P 23 [1]	①問題 P 24 [2] ・前時との違いを確認する。 ・「数の様」から「数直線」へと用語の言い換えをさせる。 ②課題 数直線を使って、2.4について調べよう。 ③個人追究→ペア交流 ・1を10等分しているから1めもりは0.1 ・2.4は2と0.4を合わせた数と考え、数直線上に示す。 ・0.4は0.1の4つ分 ・1は0.1の10個分だから、2.4は0.1の24個分 ④全体追究 ・数直線を用いたり、0.1のいくつ分かをもとにして考えればよいことを確認する。 ⑤まとめ 小数も同じ位の数が10個集まると位が1つ上がる。 ⑥評価問題 P 24 [1]、[2]
つまずきとその手立て	はしたの大きさを小数で正しく表すことができない。 →1/10L と 0.1L が同じ量であることを図を通して視覚的に理解させ、小数への抵抗をなくしていく。	0cm□mm を △cm と、小数を用いて正しく表すことができない。 →ものさし等、具体物を用いて確認し、0.1cm のいくつ分の長さになるか確認する。	位の用語と小数のしくみを正しく捉えることができない。 →0.1、0.7、2.6について、各位の数が何か確認して、評価問題に取り組むようにする。	めもりを正しく読んで小数で表すことができない。 →数直線上に小数・整数を表すこと、0.1のいくつ分かめもりをもとに確かめられるようにする。

仲間と共に運動を楽しむ児童の育成

～活動意欲を満たすための約束づくり・場の設定～

市之倉小学校 古川 稔彦

1 授業改善の視点

一人一人にとって価値ある全体追究にするためのルールづくりや場の設定

2 具体的な実践

(1) 「易しいゲーム」の中で、誰もが充実感や連帯感がもてるルールづくり

～4年生『プレルボール』より～

運動が得意な児童も、苦手な児童も、同じ運動をしていてどちらも楽しいと思える活動を工夫し、誰もが充実感が味わえる課題づくりをすること、連帯感をもつことができる活動を仕組みたい。

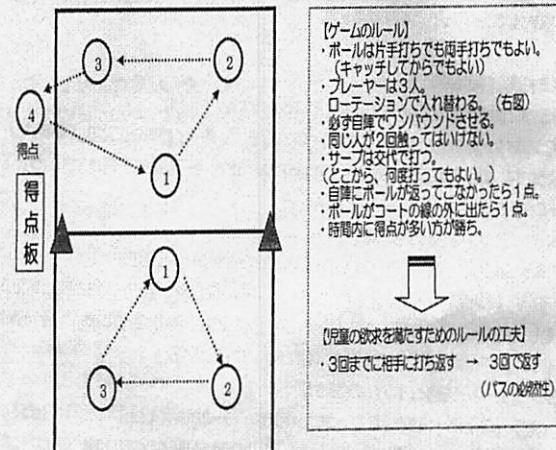
そのために大切な土台となるものがルール作りである。

『プレルボール』においては、次のような基本的なルール作りをした。

- ① ネットの高さ：40cm（図表-1）
- ② 相手コートに入りやすいように低い位置に設定
- ③ ソフトバレーボールを使用
- ④ キャッチOK（ただし1秒以内に投げる。）
- ⑤ サーブはどこから投げてもよい。また、入るまで行ってよい。（図表-2）
- ⑥ 相手に返すまでに1人1回しかボールに触れない。



図表-1 低いネット



図表-2 ゲームのやり方

(2) 一人一人が課題に向けて練習することができるための場の設定

課題を達成するまでのステップは、児童一人一人異なる。特に「器械運動」に関わる運動は、その違いが大きいことがある。

誰もが意欲的に課題に向かうための場の設定をすることが大切である。

その工夫の一つとして、特設コーナーを準備したり、進むコースを明確にしたりする場の設定をした。

① 実践1

～6年生『頭はね跳び』より～

自分にあったステップで繰り返し練習ができるようにするために、次の特設コーナーを用意した。

ア ステージからのはね下り（図表-3）

- ・高いところから下りることに慣れる
- ・はねの動作を身に付ける

イ ステージ上がり

- ・腰を高く上げる

ウ ポートボール台を利用した腰が高い位置からの試技

- ・腰の位置のつかみ、慣れ

エ 跳び箱の横にマットを敷く

- ・落下する恐怖を取り除く



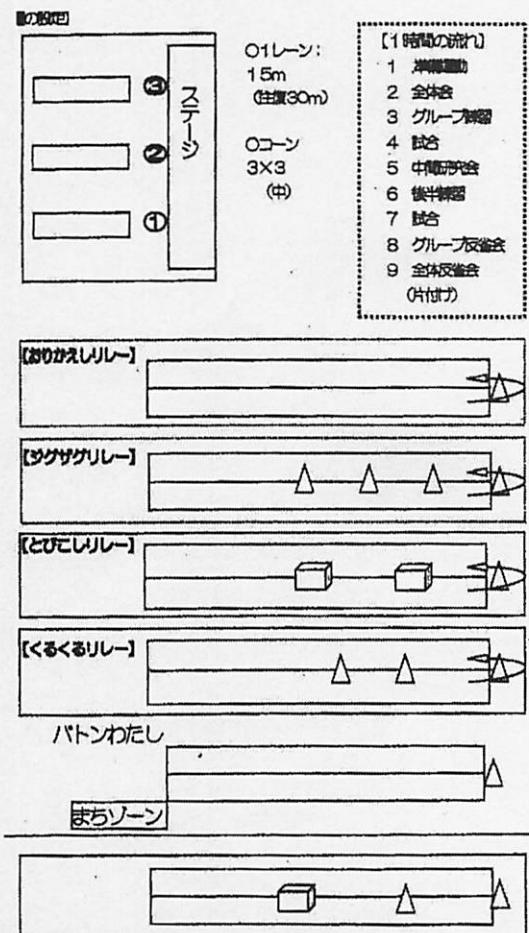
図表－3 ステージからのはね下り

② 実践2

～1年生『リレーあそび』より～

1年生であることから、走る距離は長なくてよい。走るときに目印になるものがあった方が、まっすぐに走ることができたり、児童相互の学びにつなげたりすることができた。

そこで、体育館の床にテープを貼り、次のようなコースを設定した。(図表－4)



図表－4 リレーコース

また、コース内の3つのコーンの設置位置については、走るときの「加速すること」や「コーンを回ることができるための適切な減速や身のこなし」の心地よさをより体感させるためによりよい位置を模索して、左下図のように右側半分(コースの中間部)に均等に配置することとした。(図表－5)



図表－5 3つのコーンの位置

3 実践を振り返って考えられること

児童は本来、運動することが大好きである。その「運動したい」という欲求を誰もが維持し、さらに高めることができるように、課題を設定し、活動の場や活動の約束を作ることが大切である。

それらが適切に設定できれば、児童は主体的に活動を続け、つまずきを仲間と共に克服して、ねらいにせまることができる。

「やりたい」→「できた」→「もっとできるようになりたい」というサイクルを強化することで、児童はさらに仲間と共に運動を楽しむようになる。

そして、生涯を通して運動に親しみことへつながっていくと考えられる。

言語活動の充実を図る、効果的な授業展開の工夫

～言語活動の充実を通して、確かな力につける指導～

多治見中学校 伊藤伸晃

1 授業改善の視点

授業振り返り表より

- ・確かな力を付けるための、言語活動の場の設定と方法の工夫

2 具体的な実践

(1) ペア活動で、互いの考えを伝え合う



数学の授業(単元名「平方根」)において、単位時間の終末の段階で、本時学習した「平方根の加法・減法」の計算方法を利用し、練習問題に取り組ませた。その際に、立って隣同士でペアをつくり、B4サイズのプリントに記載された2問の練習問題を、ペアの子に解き方を説明しながらプリントに計算方法と答えを記入していった。

この活動によって、仲間のつまずきを指摘したり、仲間の発言から、自分のつまずきに気づいたりすることができた。ペア活動後に個で取り組んだ練習問題では、全員が全問正解をすることができた。

- ・隣の子と確認しながら問題を解いたことで、自信がついた。
- ・ペアで交流したときに、自分の間違いを指摘してもらえたので、最後の練習問題では、全問正解することができた。

【生徒の振り返りより】

(2) 自己表現する場を段階的に位置づける

英語の授業(単元名「Lesson5 My Dream」)において、自分の夢を、相手の理解を確かめながら、分かりやすく伝えるスピーチをする活動を行った。



その際に、最初に教師の発話モデルのVTR(良い例と悪い例)を見せ、違いを比べることで、本時の目指す姿を明確にした。次に、自分の原稿に工夫すべき点(スピード、ジェスチャー、強調、繰り返しなど)を書き込み、仲間と1対1のスピーチを、相手を変えながら複数回行った。その後、中間交流の場を設け、目指す姿に近い生徒をピックアップし、全体の前でモデルスピーチを行った。このことで、仲間の姿から、再度目指す姿が明確になり、その後の自分のスピーチに取り入れることができた。

- ・スピーチに少し工夫を加えることで、相手が理解しやすくなることが分かった。
- ・理解確認やジェスチャーを取り入れてスピーチをすることができた。分かりやすい言い換えをすることも大切だということが分かった。

【生徒の振り返りより】

3 実践を振り返って考えられること

- ・実践1においては、自分の思考の流れを仲間と交流することで、自分の考えに自信をもったり、自分のつまずきに気づいたりすることができた。
- ・実践2では、仲間の姿から自らの姿を振り返り、自分のスピーチに生かすことができた。
- ・2つの実践を通して、仲間同士での交流の場を意図的に仕組むことで、話す必然性が生まれ、その活動の中で、本時付けさせたい力を身につけさせることができることができた。

「話す・聞く」ことを身に付けさせる授業改善

～必要な情報を読み取り、よさと問題点を整理し、自分の考えをまとめるための指導法～

平和中学校 研推 村田 智

1 授業改善の視点

- 授業振り返り表より
- 多くの生徒の発言

2 具体的な実践

1年国語科「論点をとらえる」

「バズセッションをしよう」

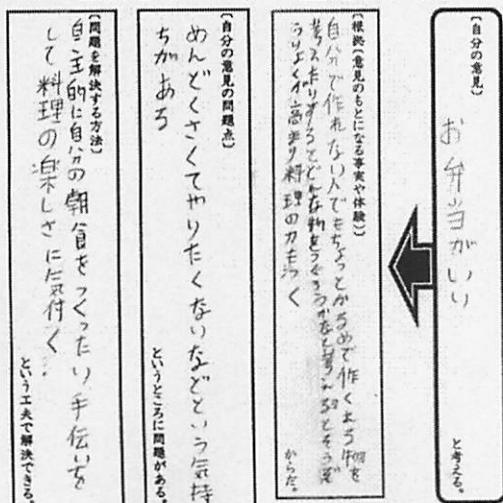
(1) 自分の考えを確実にもたせる

大事にしたいことは、根拠をもとに話すことである。よって、話し合うテーマに対して、根拠をもって自分の考えがもてるよう、以下の項目を設定した。

- ①自分の立場
- ②根拠（意見のもとになる事実や体験）
- ③自分の意見の問題点
- ④問題を解決する方法

実態として根拠もなく、「それにはとにかく反対」「嫌いだから」と自分の思い通りにならないから嫌であることを前面に出した意見を述べることがあった。

特に「自分の立場」と「根拠」を考えさせることで、確固とした意見をもたせるだけでなく、話し合いの中で、相手の考えを理解することの参考にしたり、新たな考えを生み出したりするための土台となった。
生徒のプリント



(2) 必要な情報を確実に聞きとらせる

大事にしたいことは、テーマにそった必要な情報を聞きとらせることがある。そのためには、「何となく聞いた」ではなく、「確実に聞けた」と実感させたい。その具現のために、以下の手立てを考え実践した。

- ①聞くときは一切の作業を止める
- ②聞いたことを項目ごとに書き分ける
- ③聞きもらしがないか確認してもう一度話す
- ④聞き手は書き分けたメモを見ながら内容を確認したり、聞きもらした個所を書いたりする

この実践で、誰もが相手の意見の内容を確実に聞きとることができた。そしてこの後の話し合いで、お互いの意見のよさや問題点などを踏まえて、よりよい考えを生み出そうとする活発な話し合いとなった。



話の内容を確認する場

3 実践を振り返って考えられること

「考えをもつこと」「必要な情報を確実に聞き取ること」は、国語科だけでなくどの教科でも学力を付ける上で必要なことなので、他教科とも連携して実践していくことが必要である。

英語科授業の「場の設定」における授業改善

～英語教授法を活用し、言語活動の充実を目指した指導～

小泉中学校 英語 夏目佳代子教諭

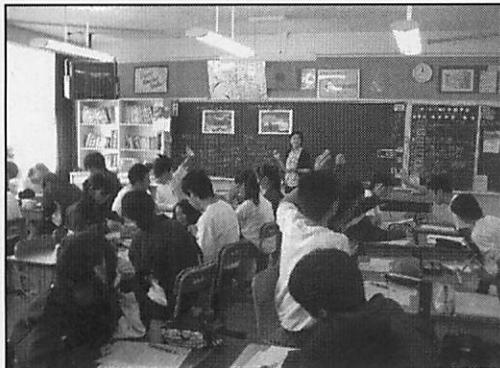
1 授業改善の視点

- ふかめるⅡ「場の設定及び多くの生徒の発言」に関わって
- 班交流（教え合い・学び合い）、または課題別等での交流の場の設定

2 具体的な実践

(1) 実践について

グローバル化対応教員育成事業「国外大学プログラム」でカリフォルニア大学アーバイン校に派遣され、英語教授法を学んだ。そこで学んだアクティビティや手法を用いた授業実践によって、生徒たちの学び合いと言語表現の充実化を目指した。以下にその手法を述べる。



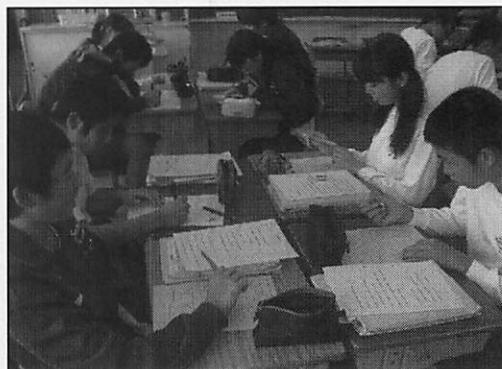
(2) Instructions 指示の出し方

生徒に活動内容などの指示を出す時は、生徒がより理解できるように、以下の点を意識して行う。

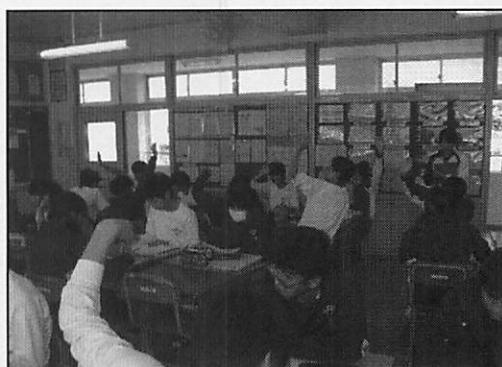
- ① Say, repeat ・・指示は1度だけでなく、生徒が理解しやすいように何回か繰り返す。何回繰り返すかは生徒やその状況次第である。
- ② At least 2 channels ・・指示は少なくとも2つの方法で出す。一番よく理解ができるのが、Visual（視覚）、次が Auditory（聴覚）、そし

て Kinesthetic（運動感覚）である。Auditory（教師が説明し、生徒は聞くだけ）にならないようとする。生徒のタイプはそれぞれであり、図や絵を見ることで（Visual）理解しやすくなる生徒もいれば、体を動かす活動を通して（Kinesthetic）理解しやすくなる生徒もいる。

- ③ Volunteers to model ・・活動を始める前に、教師と生徒、あるいは生徒同士で活動モデルを示させる。その生徒をほめて、自信をつけさせる。



- ④ Poll the students ・・指示を出した後、生徒に、指示した内容を答えさせる。答えられなければ、指示した内容が理解できていないので、活動をスタートさせても何をしてよいか分からままの状態になってしまう。



(4) T.P.S

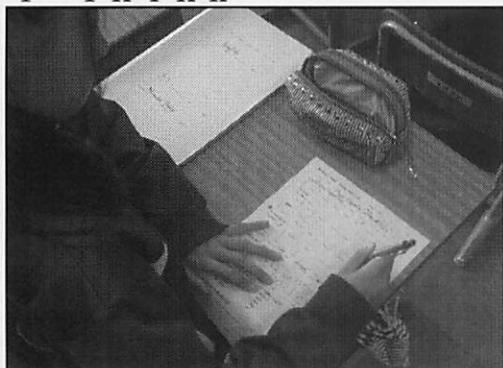
T—Think 個人で考える。

P—Pair ペアで確認、共有する。

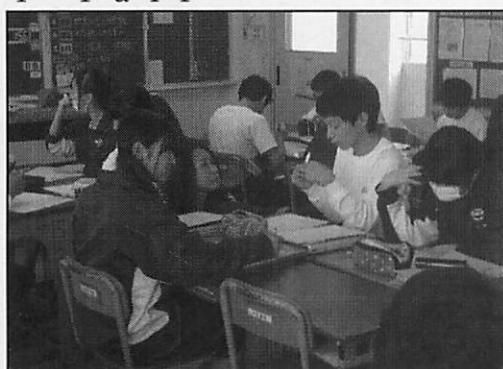
S—Share クラス全体で確認、共有する。

問題を出した時など、すぐに生徒を指名して答えさせるのではなく、ステップを踏んで進めていくことが大切である。生徒には、考えたり交流したりするための十分な時間が必要である。

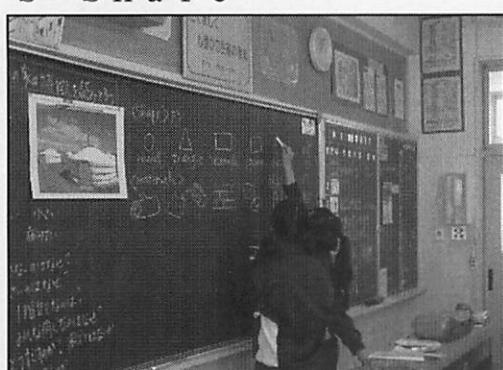
T—T h i n k



P—P a i r



S—S h a r e



(5) Task-Based Instruction

タスクに基づいた指導。何かの活動やタスクに取り組んでいく中で、英語を身につけていくという理論。

- ① Authentic · · タスクはオーセンティックであること。オーセンティックとは、「本物の」という意味である。実際の使用場面を考えたタスク（買い物に行く、旅行の計画を立てる、など）、生徒が興味をもって取り組めるタスクにする。
- ② Possible topics based on your texts · · タスクのトピックは、教科書に基づくものにするとよい。
- ③ Interdependent: Students need each other · · 生徒は、一人で学ぶのではなく、情報や考えを共有できる他の生徒（仲間）が必要である。
- ④ Step by Step · · 段階を追って指導をしていく。
- ⑤ Language support: · · ランゲージサポート タスクに取り組む中で、どんな英語を生徒が使っていくのかを示したプリントやポスターがあるとよい。生徒がいつでも見ることができるようにすることで、使える表現が増えていく。

3 実践を振り返って考えられること

大切なことは、英語で授業を進めることだけでなく、生徒自身で考えたり、仲間で考えや意見を交流したりする時間を十分にとることであると考える。アウトプットできるようにするために、インプットと練習を十分に行うことが必要である。コミュニケーション能力は急には身につかないでの、1時間の授業で行うことの道筋をしっかりとつけ、また、授業と授業のつながりをもたせられるように、計画、実施していきたい。

思考力を高める言語活動の工夫

～生徒が主体的となって学ぶ授業づくりを目指して～

南ヶ丘中学校 数学科 松本 将史

1 授業改善の視点

授業振り返り表より

- ・ 思考力を高めるための言語活動の工夫

2 具体的な実践

(1) 導入の際での言語活動

導入の際には、本時の学習内容について、どうやって考えれば解けそうか以下のような視点で見通しをもたせる場を位置付けている。

- ①どの既習の学習内容が活用できるか。
- ②どんな手順で考えていけばよさそうか。

これは、第1学年「正の数・負の数」の第10時「加法と減法の混ざった式の計算」の授業でのやりとりである。

T：「 $(+5) - (+2) + (-9) - (-4)$ 」の計算の仕方について、見通しをもちましょう。

A：今までの問題と違って、加法と減法が混じっているな。

B：前の授業で「減法は加法に直す」って習ったから、使えないかな。

C：「加法の交換法則」や「結合法則」を使うと、もっと簡単に計算できそうだよ。

[生徒の授業風景]



生徒達は、「既習の学習内容を使うことで問題を解決できる力」や「筋道立てて考えていく力」など、数学を学ぶ上で大切な思考力が、少しづつ身に付いてきている。

(2) 個人追究の際の言語活動

個人追究の際には、自分で課題に対して充分考える時間を確保している。答えを書くだけで満足することなく、

- ①その答えとなる根拠は何か。
- ②他の見方や考え方はないか。

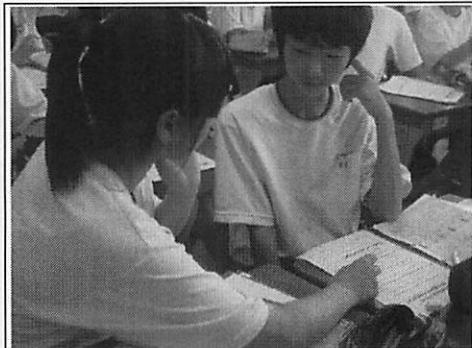
という考え方を記述するように指導している。

仲間と意見交流をすることのよさは以下のようなことがあると考えている。

- ① 分からないところを話すことにより、仲間と共に学び、課題を解決することができる。
- ② 違う考え方を求めて交流することで、多様な見方にふれることができる。
- ③ 納得させる説明ができるように話することで自分の思考を整理し、学習の深まりをもつことができる。

交流活動を行うことの価値を生徒が感じたとき、主体的に「交流したいな」という思いをもって活動できると考えている。

[生徒の交流風景]



(3) 終末の場での言語活動

終末では、生徒自身の言葉で授業のまとめを書き、発表する場面を設定した。その際には、以下の視点でまとめを書くことを指導している。

- ①今日分かったことは何か。
- ②既習の学習のどの公式を活用したか。
- ③どのような手順で考えるとよいか。
- ④さらに考えたいと思ったことは何か。

第1学年「文字と式」の第11時「1次式の加法と減法」を終えて、生徒は以下のようない感想を書いている。

【生徒の感想から】

1次式の加法と減法の計算をしました。前習った分配法則を使ってかっこを外せば、後は分配法則を使って項をまとめることで、どんな1次式の加法・減法も計算できそうだなと思いました。1次式の乗法はどうやって計算できるのか、疑問に思いました。

この生徒のように、視点をもって振り返りをすることで、本時自分が考察したことを見直すことができた。

●今回は、話すことで思考力を高める工夫の実践が中心であったが、今後は、より思考力を高められるようなノート指導の工夫を行っていきたい。

3 実践を振り返って考えられること

○「導入・追究・振り返り」の、どの場面においても、視点をもって言語活動に取り組んでいる。このことで、表現力が豊かになるだけでなく、数学の学び方を同時に指導することができる。

○特に、授業の振り返りの視点の「既習の学習内容のどれを活用したか」と「どのような手順で考えたか」を振り替えさせることによって、「次の時間も既習の学習内容を活用して考えたいな」「見通しをもって考えたいな」という思いを生徒にもたせることができつつある。

数学の楽しさを実感させる授業づくり

～図形領域の指導を通して～

多治見市立北陵中学校 片山 大樹

1 授業改善の視点

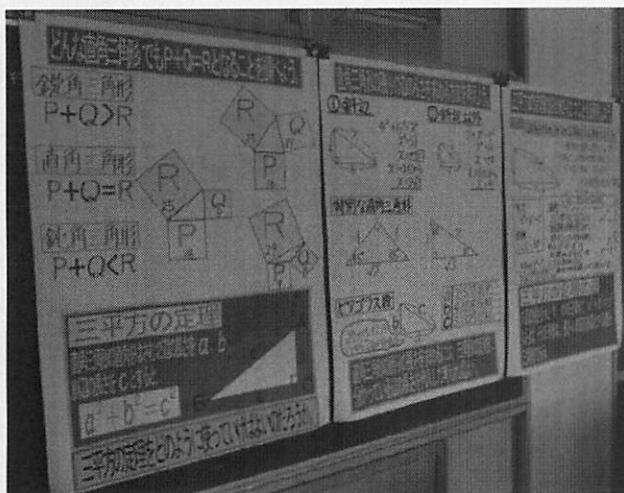
- (1) 学習内容の系統性をもとに見通しをもたせるための指導の在り方

2 具体的な実践

- (1) 学習内容の系統性をもとに見通しをもたせるための指導の在り方

どの単位時間においても既習の学習内容を活用して考えたり判断したりしていく中で、新たな学習内容を習得していく。そしてそのためには、学習内容のつながりを生徒に自覚させることが大切であると考えた。

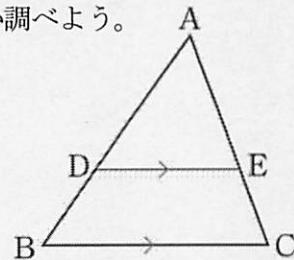
特に、図形領域の学習においては、既習の学習内容と関連させることができるのが難しいのではないかと考え、学習の足跡（【図1】）を教室側面に掲示した。毎時間どのように考えを進めてきたのか、またどんな既習の図形の性質を活用してきたのかを分かるように作成した。そうすることで、習熟の程度の低い生徒は、掲示物を見ることで、これまでの学習を視覚的に振り返ることができる。また、どのように考えていいのかという見通しをもつことができると考えた。



【図1】

第3学年「相似と比」第7時「三角形と比」では、三角形1辺に平行な線分をひいた図の中で、いつでも等しくなる線分の比があることを明らかにした。その際、次のようなやりとりを行った。

右の△ABCで、辺AB, AC上にDE//BCとなる点D, Eをとる。AD:AB, AE:ACには、どんな関係がありそうか調べよう。



Bさん：DE//BCならば、 $AD:DB = AE:EC$ ということもいえるのではないか。

T：予測しましたね。このあとどのように考えていいのか足跡掲示を見ながら確認ていきましょう。

Aさん：証明をして、いつでも成り立つといえるようにすればいいんだな。

T：何を根拠に考えていいよさそうですか。掲示物をもとに考えていいきましょう。

Bさん：△ADEと△ABCが相似ならば、対応する辺の比は等しいので、 $AD:AB = AE:AC$ といいきれると思う。

そうすることで、根拠となる既習の学習内容、考え方の道筋を明らかにできるようになり、見通しをもって取り組めるようになった。

北陵中学校 技術・家庭科の授業改善

実技指導における ICT 機器を活用した授業改善 ～タブレット端末を活用した作品交流および動画による実技評価～

北陵中学校 技術科 常富真弘

1. 授業改善の視点

タブレット端末で作品を視聴しながら、ペアやグループで確認したり、相談したりする時間を適宜設ける。

2. 具体的な実践

(1) 生徒による作品の撮影・視聴

グループ毎にタブレット端末を 1 台用意し、生徒が自分の作品を紹介する場面、撮影された動画を視聴する場面を設ける。この交流を通して、自分が作成した作品について振り返ったり、相手に伝えたりするための情報を取捨選択する情報活用能力の育成が可能となる。また、グループで自分のグループの仲間や他のグループの仲間の作品を視聴することを通して、自分の作品を工夫するための視点や発想を得ることが可能となると考えられる。

具体的には、情報の単元において、自分たちが家庭で使用するプログラムを作成し、専用の教材に実装する授業で実践を行った。撮影時には、プログラムの工夫した点や、作成したフローチャート、実際の動作等を視聴した人が理解できるよう工夫し撮影するよう例を示しながら指導を行った。

さらに、プログラムの作成の場面では、他のクラスで撮影された動画や教師が用意した作成例を適宜見て良いこととした（図 1）。



図 1 タブレット端末で作品を視聴する様子

また、生徒が撮影した動画を授業後に回収し、授業プリントの記述内容と合わせて、各生徒が実

装したプログラムの動作評価を実施した。

3. 実践を振り返って考えられること

(1) 生徒による作品の撮影・視聴

授業の終末で記入する振り返りシートには、「それぞのプログラムを見て『個性が出るな』と感じた」との記述（図 2）や他のクラスの動画を視聴し自分の作成するプログラムとの違いを授業中に述べる生徒もいた。

チャイム席	挨拶	私語なし	課題達成	協力	片付け	合計
○	○	○	○	○	○	17
4年全員分の動画、すごいのが終わった。						
みんなのプログラムを見て「個性が出るな」と感じた。かわいいプログラム、派手なプログラム、珍しいプログラムだった。						
この活動は楽しい。他のグループのプログラムを見できたこと、驚かされたこと、工夫したことなど具体的に書こう。						
のが楽しめた。						

図 2 振り返りシートの例

のことから、動画の視聴は、他者の作品と自分の作品を比較し、他者の作品の良さを知ることに有効であるとともに、自己の作品を俯瞰し、自分の作品の良さに気づくことに有効であったと推察される。また、授業中は、複数の動画を何度も視聴する姿も見られた。このことから、他者の作品を自分の作成するプログラムの参考にしていたと考えられる。活動の見通しを持たせることやスムーズなプログラム作成に有効であったと考えられる。

さらに回収した動画からの評価では、プリントでは確認できない実際の動きが確認でき、生徒が既習の事項を活用できているかについて詳細に確認することができた。そのため、本実践を通して、生徒のより具体的な実態把握ができ、机間指導時の個に応じた指導に有効であった。

今後は、定期的に各生徒の作品撮影を行い、仲間の姿だけでなく、過去の姿を提示することで、技能レベルの伸びの実感を味わわせ、自己肯定感を育成させる実践を行っていきたい。

保健体育科の授業改善

生徒の実態、種目の特性を生かした単元指導計画

～「場の設定」「学習内容」「指導内容」に着目して～

笠原中学校 保健体育科 小野秀也

1 授業改善の視点

本校では、生徒の運動欲求を満たすことを前提として、「運動の側面」「集団の側面」の2つの面を関連させながら単元指導計画を作成し、授業を進めている。生徒の実態や種目の特性を考慮し、「場の設定」「学習内容」「指導内容」の3点を単元指導計画を改善する視点として持ち、以下のような実践を取り組んだ。

2 具体的な実践

(1) 生徒の実態に合わせた「場の設定」

【1年生 バレーボールの実践より】

初めてバレーボールに取り組む生徒が、バレーボールの楽しさを味わうには、ルールやボール、ネットの高さがとても重要であるため、生徒の実態に合わせて以下のように「場」を設定した。

○ボールの選択の場

バレーボールとソフトバレーボールを準備。生徒にボールの違いをつかませどちらが扱いやすいかを比べさせた。

→ソフトバレーボールを選択

「ボールが当たると痛い」といった不安要素を取り除くことができる。

○ネットの高さの場

200cmと220cmの2つのネットを提示し、サービスの練習や試しのゲームを行わせた。

→220cmを選択

「サービスの軌道が高くなり、生徒がボールの下に入りやすくなる」ためラリーが続きやすくなる。

○独自ルール作成の場

サービスを行うラインを3mネットに近づける。

→多くの生徒がサービスを相手コートに入れることができ、「ラリーの継続」へつながる。

(2) 学習内容の精選

【1年生 ソフトボールの実践より】

1年生でも、ゲームの攻防といったソフトボールの楽しさを十分に味わわせるために「打撃」を中心に考えた。「打てる」ことで進塁や得点をする楽しさを味わい、またそれを阻止することで、失点を少なくする楽しさを感じることへつながった。

そのために、ボールをミートする技能を身につけさせることを単元の活動の中心に置いた。まず、静止している状態のティーボールから、動いている状態のトスボール、そしてピッチャーが投げるボールへと段階を踏んで練習させることにした。こうして「打てる」楽しさを味わせたあと、単元後半には、ゲームを取り入れ、実践の中で自分やチームの課題を見つけ、解決していく学習を開拓できるようにした。



(3) 指導内容のステップ化

【1年生 バレーボールの実践より】

相手コートにしっかりボールを返すためには、基本となるボール操作、身体操作が必要になる。そこで、単元を大きく2つのステップに分けて指導した。

第1ステップ

トスやレシーブなど基底技能の力をつける

第2ステップ

ボールの下に入るための身体操作（空間認識）の力をつける

<バレーボールにおける基本的指導過程>

過程	(それらしく) できない	(それらしく) できる
運動の姿 ○ボール 保持者	○ボールの正面・裏下に 入って直接返球する ○ボールの中心をじうえ たサービス	○バスをつないで返球を て近づいて構える ○ボールの方に体を回す で返球を ○要定したバスをつない てボールを待つ ○ボールが来たなり近づき 自分の位置に戻り構え ら前衛ひづいで返球を ○空いた場所をねりつて 返球を
指 導 内 容	攻 防 ・連 係 攻 撃 防 御	<ul style="list-style-type: none"> - サービスがコートに入る、 - コート内に高く、深く、大きく返球して攻撃、 - 狙ったところにサーブが打てる、 - 相手が上げにくい所を見つけて返球、 - サーフレシーブからトスにつないで攻撃、 <ul style="list-style-type: none"> - 直接返球、 - カバーリングから2~3人の連係バス、 - サーフレシーブから前方向へ2~3人の連係バス、
ポール 操作	<ul style="list-style-type: none"> - 頭の上で三角形を作りオーバーハンドバスをする、 - ひじを伸ばし、ひざを使ってアンダーハンドバスをする、 	<ul style="list-style-type: none"> - ボールを高く上げる、 - ボールを中央に上げる、 - ボールを前方向におげる、 - 相手コートに狙って返すことができるトスをあげる、
身体 操作 (空間 認識)	<ul style="list-style-type: none"> - 落下点の裏下に入る、ボールの正面に入る、 - オーバーハンドバスとアンダーハンドバスの使い分け、 	<ul style="list-style-type: none"> - ボールに1歩近づいてカバーする動き、 - ボールに近づく、守る位置へ戻る動き、 - 相手コート方向へ向き直る動き、 - ボールに近づく、守る位置へ戻る動き、
達成めど	1年生	3年生

上記の表は、そのステップをさらに細分化した基本的指導過程である。これを作成することで、指導内容を整理した。

3 実践を振り返って考えられること

生徒の実態を考慮した「場の設定」は、生徒が安心して学習するために不可欠だと感じた。「学習内容の精選」や「指導内容のステップ化」については、その種目でどんな技能を身につけさせたいのかを、基本的指導過程を作成することで整理できた。その結果、生徒にも単元の出口での姿や活動をイメージしやすくなり、互いに具体的なアドバイスや援助をすることができた。

